見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち

October 2017

vol.42

October

S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

◆東観音寺

所在地：豊橋市小松原町

交　通：JR 東海道本線「二川」駅 南 約 5km

豊橋市の太平洋岸では、これまで地震のたびに巨大な津波が押し寄せてきた記録が残されており、その高さは、明応 7（1498）年の明応地震では最大 8m 程度、宝永 4（1707）年の宝永地震では最大 7m 程度、嘉永 7（1854）年の安政東海地震では最大 10m 程度にも上ったとされています。その浸水範囲をたどってみると、一部の小河川沿いで津波が遡上して内陸部まで浸水している例はありますが、大部分が海岸線付近にとどまっています。これは、豊橋市の太平洋岸には、70m もの高さの海食崖が連なっているためです。

古来、この海食崖の下の浜辺には伊勢神宮へとつながる伊勢街道が通っており、街道沿いに多くの集落があったと伝えられています。東観音寺は、この伊勢街道沿いの小松原村を治めていたお寺で、鎌倉時代から室町時代にかけて栄え、江戸時代に入っても徳川家の庇護を受け繁栄した名刹です。江戸時代初期（宝永地震以前）の「東観音寺古境内図」には、東観音寺があった付近の海岸には伊勢街道が通り、町屋が建ち並ぶ様子が残されており、もともとは東観音寺がこの伊勢街道の近く、海食崖の下に立地していたことがわかりますが、宝永地震の津波により大きな被害を受け、正徳 3(1713）年までに海岸から北に約 2km 離れた現在の地に移転をしています。なお、小松原海岸の雑木林の中の移転前の東観音寺の跡地には、「開山行基菩薩」と刻まれた石碑が残されています。

この移転の様子は、江戸時代初期と江戸時代中期（宝永地震以後）の「小松原村絵図」からもうかがい知ることができます。江戸時代初期の村絵図では、太平洋の海岸沿いに東観音寺や集落が集まって描かれていますが、江戸時代中期以降の村絵図では、東観音寺や集落の多くが内陸部に描かれており、津波によって東観音寺とともに多くの集落が海食崖の上の高台に移ったものと推測されます。

宝永地震の津波では、東観音寺や小松原村以外にも海食崖の下の伊勢街道沿いの集落で多くの被害が発生し、その結果、伊勢街道は壊滅的な打撃を受け、多くの寺院・神社が海食崖の上の高台に移転しています。また、移転した寺院・神社の中には、周りの集落よりもさらに高台に場所を選んだものもあり、津波被害を繰り返さないための強い意志が感じられます。こうした高台への移転による津波対策は、宝永地震から約 150 年後の安政東海地震の際に大きな効果を発揮し、安政東海地震の津波で被害を受けたとされる社寺は 2 社寺にとどまっています。

このような災害に対する備えの成功事例は、現代の防災を考える上で大変参考になる事例であり、災害に対する教訓の伝承として、もっともっと積極的に伝えられるべきものであると言えるのではないでしょうか。

現在の東観音寺

◆災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

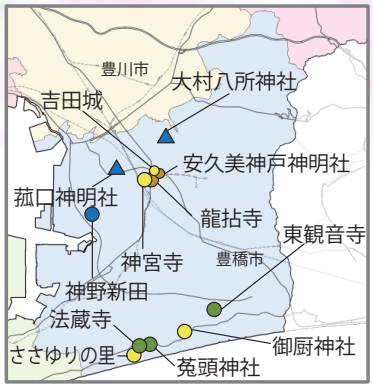
◆ 東観音寺の周辺には…

● ささゆりの里（震災鎮めの石碑）

所在地：豊橋市伊古部町

交　通：豊橋鉄道渥美線「大清水」駅 南東 約 5km

案内板には、「この石碑は、安政 6 年に網元の仙太郎さんが震災が二度と起きないことを願って建てました。」と記されており、また嘉永 7(1854）年安政東海・南海地震の言い伝えによれば「大津波を伴っており、推定 29m の高台まで海水が上がった」と記されています。



● 御厨（みくりや）神社（絵馬）

所在地：豊橋市西七根町

交　通：JR 東海道本線「二川」駅 南 約 5.5km

御厨神社は、宝永 4（1707）年の宝永地震を受けて移転しています（その後、安政東海地震の後にも移転）。絵馬は安政東海地震の惨状を伝えるもので、この時、舟が助かったことに感謝して、助かった舟の部材を絵馬にして奉納したものです。

◆ 詳細な地図は『歴史地震記録に学ぶ 防災・減災サイト』（http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html）をご覧ください。

★ ええじゃないか豊橋まつり

ええじゃないか豊橋まつりは、毎年 10 月第 3 週の土曜日･日曜日（平成 29 年は 10 月 21, 22 日）に開催される市民参加型のまつりで、東三河地域最大級の市民まつりとも言われています。

土曜日の夜に行われる「総おどり」はみどころの一つで、駅前大通を歩行者天国にするなどして、市民 2 万人がまちなかで踊りを繰り広げます。また、日曜日にはパレードとカーニバルを融合した「パレカ」が開催され､参加者は『ええじゃないか』をメッセージテーマとして工夫を凝らしたダンスや演奏、仮装などのパフォーマンスを披露し、沿道の観客を楽しませます。そのほかにも、観客と一緒にとにかく踊りを楽しむ「ええじゃないか舞踊三昧」や「こども総おどり」など、街中が踊りにあふれ、大いににぎわいます。

豊橋まつり振興会 HP より

10 月のあいちの花

みんなの園芸 HP より

平成 29 年 10 月のあいちの花はポットマムです。

ポットマムは鉢植えのキクの総称で、1950 年代にアメリカで鉢植え用にキクの矮性園芸品種が育成されたのが始まりです。（名前はポット（鉢）とクリサンセマム（キク）を合わせた造語です。）

ポットマムには秋咲き系の品種が用いられますが、キクは日が短くなると花芽をつける短日植物なので、人工的に電気で照らしたり、幕で覆うなどして日照時間を調整することで、通年開花株が生産されています。

●ブレイクタイム●

♪ うなぎの腹開きと背開き

うなぎを焼くときの割き方には、お腹を開く腹開きと、背中を開く背開きの 2 種類があり、前者は関西風、後者は関東風です。商人が多い関西では、腹をわって話をするの意から腹開きが主流になり、武士が多い江戸では切腹をイメージさせる腹開きを避け背開きが主流になった、と言われています。この腹開きと背開きの境が、愛知県豊橋市と静岡県浜松市あたりになっています。

関西風のうなぎは蒸さずに焼いたパリッとした食感、関東風のうなぎは蒸す手間を加えたふわっとした食感ですが、関東風と関西風のお店が入り交じる浜松市では、関東風でありながら蒸す時間を短めにするお店もあるようです。

◆ この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆ 県内の歴史地震記録をホームページで紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『歴史地震記録に学ぶ 防災・減災サイト』（http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html）をぜひご覧ください。

（発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター　平成 29 年 10 月）